

褒めるか叱るか曖昧な状況での親の養育態度が 自尊感情と自己・他者スキーマに及ぼす影響

佐々木 真吾・陣後 瑞希*

Effects of Parental Parenting Attitudes on Self-Esteem and Schemata Concerning Self and Others: Consideration in a Complicated Situation Whether to Praise or Scold

Shingo SASAKI and Mizuki JINGO

抄 録

子育てには、子どもの行動に良い面と悪い面が存在するなど、褒めるか叱るか曖昧な状況が多々存在する。本研究では、褒めるか叱るか曖昧な状況での親の養育態度が、自尊感情と自己や他者へのスキーマの形成に及ぼす影響を検討するために、大学生を対象に質問紙調査を行った。曖昧な状況での親の養育態度は、褒めるか叱るか曖昧な状況において、幼少期にどの程度褒められたか、叱られたかを回想してもらうことで測定した。また、既存の尺度を用いて、自尊感情、自己および他者へのポジティブ、ネガティブなスキーマを測定した。結果、褒められることが多い者ほど、自尊感情や他者へのポジティブなスキーマの得点が高かった。一方で、叱られることが多い者ほど、自己へのネガティブなスキーマの得点が高かった。特に、褒められずに叱られることが多い者は、自己へのネガティブなスキーマを形成していた。以上の結果から、褒めるか叱るか曖昧な状況では、子どもの行動のネガティブな側面のみを指摘するだけでなく、ポジティブな側面を見いだして褒めることが、心理的に健全な自己概念の発達を促進することが示唆された。

キーワード：養育態度、褒める、叱る、自尊感情、自己・他者スキーマ

1. 問題と目的

これまでの先行研究から、親の養育態度は子どもの心理的発達や適応に影響を及ぼすことが明らかになっている。例えば、近年の研究では、親の受容的な養育態度が子の養育認知を經由して共感性を高めることや(浅野・吉澤・吉田・原田・玉井・吉田, 2016)、社会的に望ましい行動を褒めるといっつけ行動が、子の養育認知を經由して反社会的な認知や行動を抑制すること(吉澤・吉田・原田・浅野・玉井・吉田, 2017)が示されている。また、母親の過保護な養育態度が過剰な外的適応を促進し、内的適応を低下させることや(任・林, 2020)、親

* 瀬戸市役所健康福祉部 南保育園

の権威に対する親と子の認識の不一致が、親子間の葛藤を促進し、抑うつや不安を強めること (田・平石・渡邊, 2017) が示されている。以上を含むこれまでの先行研究から、一般に子どもを受容する養育態度や、子どもの自律性や興味・関心を尊重する養育態度が子どもの心理的発達や適応を促進することが示唆されている (e.g., Galambos, Barker, & Almeida, 2003; 伊藤・中島・望月・高柳・田中・松本・大嶽・原田・野田・辻井, 2014; Krevans & Gibbs, 1996)。

それでは、子どもの行動を受容したり、子どもの行動を尊重したりすることを迷うような状況では、親はどのように子どもに関わることが望ましいのであろうか。子育ての場面では、親にネガティブな感情とポジティブな感情を同時にもたらすような子どもの行動が多々存在する。また、社会的に許容しがたい行動と望ましい行動が共に含まれる場面も多々存在する。例えば、親の大事にしていた物を子どもが壊してしまったが、正直に謝りに来たなどの場面である。この場面では、親は怒りを感じて叱りたくなるかもしれない。また、物を乱暴に扱うという行動は社会的には望ましくないと、叱る必要があると考える可能性もある。一方で、正直に謝ったことは望ましい行動であるとして、子どもを褒める可能性もあるだろう。このような、褒めるか叱るか曖昧な状況における親の養育態度は、子どもの心理的発達や適応にどのような影響を及ぼすのであろうか。

佐々木 (2021) は、大学生を対象に、褒めるか叱るか曖昧な状況での親の養育態度を回想してもらい、曖昧な状況での親の養育態度がレジリエンスと保育観の発達に及ぼす影響を検討した。その結果、レジリエンスの合計得点は、褒められることが多く叱られることが少なかった者で、褒められることが少なく叱られることが多かった者よりも高かった。また、子どもと対等に関わることを重視する協調的保育観でも同様の結果が得られ、褒めるか叱るか曖昧な状況においても、子どもを褒めるという受容的な対応が、レジリエンスや保育観の発達を促進することが示された。

それでは、レジリエンス以外の心理特性においても、同様の結果が得られるのであろうか。例えば、「自尊感情」は、これまでの先行研究から、親の養育態度との関連が明らかになっている心理特性である (e.g., 趙・松本・木村, 2011; Felson & Zielinski, 1989; Kawash, Kerr, & Clewes, 1985; Rudy & Grusec, 2006; 島, 2014)。小・中学生を対象とした研究では、小・中学生ともに親から褒められる頻度が多いほど自尊感情が高くなる一方で、叱られる頻度が多いほど自尊感情が低くなることや (兄井・須崎・横山, 2013)、大学生を対象とした研究においても、幼児期に親から褒められる頻度が多かったと回答した者ほど自尊感情が高いこと (井上, 2015, 2018) が示されている。そこで本研究では、親の養育態度の影響が明らかになっている自尊感情に焦点を当て、曖昧な状況における親の養育態度が子の心理的発達に及ぼす影響をさらに検討する。レジリエンス以外の心理特性について検討することで、褒めるか叱るか曖昧な状況における、親の望ましい関わり方をより詳細に検討することができるだろう。

加えて本研究では、自尊感情と関連する概念である、自己や他者についてのスキーマにも焦点を当て、検討を行う。スキーマとは、過去の経験から形成される、ある事物などに対する抽象的・一般的な知識のことである (Eysenck, Ellis, Hunt, & Johnson-Laird, 1990 野島・重野・半田訳 1998)。Fowler, Freeman, Smith, Kuipers, Bebbington, Bashforth, Coker, Hodgekins, Gracie, Dunn, & Garety (2006) は、様々な精神疾患が自己や他者へのネガティブな評価と関連することをふまえて、自己や他者についてのスキーマを測定する尺度を作成した。この尺度はBrief Core Schema Scales (BCSS) と名付けられ、自己へのポジティブなスキーマ (Positive Self: 以下、PS)、自己へのネガティブなスキーマ (Negative Self: NS)、他者へのポジティ

ブなスキーマ (Positive Others : PO)、他者へのネガティブなスキーマ (Negative Others : NO) を測定することができる。研究の結果、尺度の信頼性、妥当性が示され、自己や他者へのポジティブなスキーマを持つ者ほど自尊感情が高く、自己や他者へのネガティブなスキーマを持つ者ほど自尊感情が低いことが明らかになった。また、精神疾患の患者は一般の学生よりも、自己や他者についてのネガティブなスキーマを保有することが示されており、精神的健康との関連も示されている。

BCSSは日本語版尺度も作成されており、日本人においても信頼性、妥当性が示され、自尊感情との関連が明らかになっている (内田・川村・三船・濱家・松本・安保・上埜, 2012; 山内・須藤・丹野, 2009)。スキーマが過去の経験から形成される抽象的・一般的な知識であるならば、自己や他者についてのスキーマも親の養育態度の影響を受けることが予想される。自尊感情に加え、自己や他者についてのポジティブ、ネガティブなスキーマについて検討することで、曖昧な状況における親の養育態度が、自己の発達という側面にいかに影響するのかをより詳細に検討することができるであろう。

以上をふまえ、本研究では、子どもを褒めるか叱るか曖昧な状況における親の養育態度が、自尊感情と自己や他者へのスキーマの形成に及ぼす影響を検討することを目的とする。これを検討するために、本研究では、大学生を対象に、佐々木 (2021) の研究手法を用いて質問紙調査を行う。大学生を対象とするのは、親の養育態度に対する子どもの認知が、心理的発達や適応に繋がること示されているからである。本研究では、大学生に幼少期の親の養育態度を回想してもらい、親の養育態度に対する認知を調査する。その上で、養育認知の違いによって、大学生が現時点で保有する自尊感情と自己や他者へのスキーマがいかに異なるかを調査する。これにより、褒めるか叱るか曖昧な状況における親の養育態度が、自尊感情と自己や他者へのスキーマの形成に及ぼす影響を明らかにする。最後に、結果をふまえて、曖昧な状況における養育者の望ましい関わり方を考察することを目指す。

2. 方法

(1) 参加者

参加者は大学生80名であった。回答に不備があった3名を除外し、分析は77名で行った。

(2) 質問紙

1) 曖昧な状況での親の養育態度を測定する質問

佐々木 (2021) で使用した質問を用いた。日常生活で出会う可能性のある、褒められるか叱られるか曖昧な状況を4つ提示し、それぞれの場面で幼少期に親から褒められた程度、叱られた程度を5段階で回答してもらった (Table 1)。

2) 自尊感情を測定する質問

内田・上埜 (2010) により信頼性、妥当性が確認された日本語版Rosenberg自尊感情尺度 (日本語版RSES) を使用した。本尺度は10項目の単因子構造である。各質問について、自分にあてはまるかどうかを4段階で回答してもらった。

Tabel 1 曖昧な状況での親の養育態度を測定する質問

あなたの幼少期の親の養育態度についてお尋ねします。次のようなことがあった時、親からどの程度褒められましたか、叱られましたか。
同じ体験をしたことがない場合、似たような体験や予想で回答してください。

- | | |
|----------------------------|----------------|
| 1. かけっこの際に、ゴール直前で転んでしまった | 褒められた (5段階で回答) |
| | 叱られた (5段階で回答) |
| 2. 友達におもちゃを譲ったけど、片付けの時間だった | |
| 3. お手伝いをしたくて、勝手にした | |
| 4. 親の大切なものを壊したが、素直に話した | |

注) 2~4についても同様に、褒められた・叱られた程度を5段階で回答してもらった。

3) 自己および他者についてのスキーマを測定する質問

山内ら (2009) により信頼性、妥当性が確認された日本語版Brief Core Schema Scales (日本語版BCSS) を使用した。この尺度は、Fowler et al. (2006) により開発された尺度を日本語訳したものである。自己へのポジティブなスキーマ (PS)、自己へのネガティブなスキーマ (NS)、他者へのポジティブなスキーマ (PO)、他者へのネガティブなスキーマ (NO) の4因子構造であり、各因子6項目の質問から構成される。各質問について、自分の考えにあてはまるかどうかを5段階で回答してもらった。

(3) 手続き

名古屋女子大学の研究倫理委員会の承認を受けて実施した (承認番号2020-14)。大学の講義終了後に、調査内容を説明し、調査への参加を求めた。この際、参加は任意であり、参加しないことによる不利益は一切ないことを伝えた。質問紙配布後、回答は自宅で行うように伝え、後日、回収した。参加者には、質問紙への回答により参加に同意したとみなすことを伝えた。

3. 結果と考察

(1) 確認的因子分析

自尊感情を測定する日本語版RSESについて、先行研究で明らかとなった単因子構造を仮定したモデルで確認的因子分析を行った。その結果、モデルの適合度は $\chi^2=89.178$, $df=35$, $p<.001$, $GFI=.800$, $AFGI=.686$, $CFI=.812$, $RMSEA=.143$, $AIC=129.178$ と、十分な値が得られなかった。そこで、因子負荷量が低い1項目 (.238) を削除し、再度、確認的因子分析を行った。その結果、モデルの適合度は $\chi^2=73.579$, $df=27$, $p<.001$, $GFI=.806$, $AFGI=.676$, $CFI=.832$, $RMSEA=.151$, $AIC=109.579$ と、削除後の方があてはまりは良かった。適合度は十分ではないが、参加者の少なさや女子のみであるというサンプルの問題から適合度が低い可能性が考えられた。そのため、モデルの適合度は許容可能であると判断した。また、項目を削除したうえで信頼性係数を求めたところ、 $\alpha=.867$ と十分な値を示した。これをふまえ、日本語版RSESは先行研究と同様に単因子構造とし、1項目を削除したものを自尊感情得点として分析に用いることにした (Table 2)。

次に、自己および他者についてのスキーマを測定する日本語版BCSSについて、先行研究で明らかとなった4因子構造を仮定したモデルで確認的因子分析を行った。その結果、モデルの

適合度は $\chi^2 = 453.935$, $df = 246$, $p < .001$, $GFI = .674$, $AFGI = .602$, $CFI = .729$, $RMSEA = .105$, $AIC = 561.935$ であった。適合度が十分ではなかったため、因子負荷量の低いNSの2項目 (.057,

Table 2 日本語版RSESの確認的因子分析の結果

自尊感情 ($\alpha = .867$)	因子負荷量
1 私は、自分自身にだいたい満足している。	.647
2 時々、自分はまったくダメだと思うことがある。	.423
3 私にはけっこう長所があると感じている。	.803
4 私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。	.513
5 私には誇れるものが大してないと感じる。	.717
6 時々、自分は役に立たないと強く感じることもある。	.648
7 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。	.616
8 よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう。	.741
9 私は、自分のことを前向きに考えている。	.715
削除項目	
自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う。	

Table 3 日本語版BCSSの確認的因子分析の結果

	因子負荷量
PS : 自己へのポジティブなスキーマ ($\alpha = .822$)	
PS1 私はおもしろい人間だ。	.682
PS2 私は尊敬されている。	.683
PS3 私は才能がある。	.831
PS4 私は良い人間だ。	.570
PS5 私は成功している。	.531
PS6 私は価値のある人間だ。	.701
NS : 自己へのネガティブなスキーマ ($\alpha = .782$)	
NS1 私は愛されていない。	.617
NS2 私は悪い人間だ。	.454
NS3 私は価値がない。	.979
NS4 私は失敗者だ。	.684
PO : 他者へのポジティブなスキーマ ($\alpha = .831$)	
PO1 他の人たちは信用できる。	.825
PO2 他の人たちは協力的だ。	.576
PO3 他の人たちは心を開いてくれる。	.806
PO4 他の人たちは正直だ。	.663
PO5 他の人たちは良い人間だ。	.628
NO : 他者へのネガティブなスキーマ ($\alpha = .777$)	
NO1 他の人たちは容赦のない人間だ。	.754
NO2 他の人たちは手厳しい。	.675
NO3 他の人たちは悪い人間だ。	.703
NO4 他の人たちは敵対的だ。	.449
NO5 他の人たちは意地悪だ。	.575
NO6 他の人たちはずるい。	.516
削除項目	
NS5 私は傷つきやすい。	
NS6 私は弱い。	
PO6 他の人たちは公平だ。	

.338)、POの1項目(.321)を削除し、再度、確認的因子分析を行った。結果、モデルの適合度は $\chi^2=310.734$, $df=183$, $p<.001$, $GFI=.728$, $AFGI=.656$, $CFI=.811$, $RMSEA=.096$, $AIC=406.734$ と、削除後の方があてはまりは良かった。また、項目を削除した上で、各因子の信頼性係数を求めたところ、概ね良好な値を示した (Table 3)。これをふまえ、日本語版BCSSは先行研究と同様に4因子構造とし、3項目を削除したものを自己および他者へのポジティブ、ネガティブスキーマ得点とした。

次に、自尊感情得点と各スキーマ得点について相関分析を行った (Table 4)。結果、山内ら (2009) と、概ね一致する結果が得られた。具体的には、自尊感情とPS、NS、NO間の相関、PSとNS、PO間の相関、NSとNO間の相関は、先行研究と一致する結果である。モデルの適合度は十分ではなかったが、得点間の相関分析の結果をふまえると、尺度の妥当性は十分であるといえる。

Table 4 各得点の相関分析の結果

	叱得点	自尊	PS	NS	PO	NO
褒められ得点	-.069	.280*	.166	-.302**	.333**	-.126
叱られ得点		-.091	-.147	.293*	-.067	-.024
自尊感情			.761**	-.695**	.520**	-.226*
PS				-.494**	.468**	-.044
NS					-.448**	.351**
PO						-.537**

* $p < .05$ ** $p < .01$

(2) 各得点による相関分析

曖昧な状況4場面の褒められた程度、叱られた程度の回答について、合計点をそれぞれ求め、褒められ得点、叱られ得点とした。その上で、褒められ得点、叱られ得点と自尊感情および各スキーマの得点について相関分析を行った (Table 4)。

その結果、褒められ得点と自尊感情およびPOとの間に有意な正の相関があった。また、褒められ得点とNSとの間に有意な負の相関があった。さらに、叱られ得点とNSとの間に有意な正の相関があった。

以上の結果から、曖昧な状況で褒められることが多い場合、自尊感情が高まり、他者へのポジティブなスキーマが形成されることが明らかになった。また、褒められることが多い場合、自己へのネガティブなスキーマの形成が抑制されることもわかった。これに対して、曖昧な状況で叱られることが多い場合は、自己へのネガティブなスキーマが形成されることが明らかになった。

(3) 褒められ・叱られ得点の群分けによる分散分析

褒められ得点および叱られ得点のそれぞれの平均値をもとに、平均値よりも得点が高い者を高群、低い者を低群として群分けを行った (褒められ得点、叱られ得点の順に、 $M=13.55, 7.90$)。その上で、褒められ高群・低群、および叱られ高群・低群の組み合わせにより、次の4群に参加者を群分けした：(a) 褒高・叱高群18名、(b) 褒高・叱低群19名、(c) 褒低・叱高群21名、

(d) 褒低・叱低群19名。

各群の自尊感情および各スキーマ得点の平均値および標準偏差をTable 5に示す。各得点について、一要因の分散分析を行った結果、NSでのみ有意差があった ($F(3, 73) = 3.17, p < .05, \eta^2 = .12$)。Tukey法による多重比較を行ったところ、褒低・叱高群 > 褒高・叱低群であった。曖昧な状況において、褒められることが少なく叱られることが多い者は、褒められることが多く叱られることが少ない者よりも、自己についてのネガティブなスキーマを形成するといえる。

Table 5 各群の各得点の平均値と標準偏差

	褒高・叱高群		褒高・叱低群		褒低・叱高群		褒低・叱低群	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
自尊感情	22.94	5.46	23.74	4.76	21.19	4.95	20.68	4.81
PS	18.00	4.30	18.58	3.64	16.71	4.26	17.21	3.46
NS	8.44	3.03	8.00	2.77	10.52	3.06	9.21	2.15
PO	18.50	1.92	19.11	3.00	17.86	3.68	16.95	2.68
NO	13.67	3.18	13.37	2.83	13.90	3.22	14.63	3.47

4. 全体考察

本研究では、子どもを褒めるか叱るか曖昧な状況における親の養育態度が、子どもの自尊感情と自己や他者へのスキーマの形成に及ぼす影響を検討した。以下、自尊感情、自己や他者へのスキーマについて、個別に考察を述べる。その後、本研究の応用的示唆として、褒めるか叱るか曖昧な状況における養育者の望ましい関わり方と、本研究の限界および今後の課題を述べる。

(1) 曖昧な状況での養育態度が自尊感情に及ぼす影響

相関分析の結果、自尊感情と褒められ得点との間に正の相関があり、褒められることが多かったと回答した者は自尊感情が高かった。褒められることで自尊感情が高まるという結果は、先行研究と一致する。このことから、褒めるか叱るか曖昧な状況においても、子どもを褒めるという受容的、尊重的な親の養育態度が、子どもの自尊感情を高めることが明らかになった。

褒められ得点に対して、叱られ得点と自尊感情の相関は有意でなかった。この結果は、大学生を対象に調査を行った井上 (2015, 2018) の研究と一致する。ただし、小・中学生を対象に調査を行った兄井ら (2013) の研究では、叱られる頻度が自尊感情を低めることが示されており、叱られることの影響は一貫した結果が得られていない。そのため、本研究の結果が、年齢の違いによるものか (大学生と小・中学生)、状況の違いによるものか (曖昧な状況と一般的状況) は不明である。叱ることが自尊感情に及ぼす影響は、今後より詳細に検討していくことが求められる。

(2) 曖昧な状況での養育態度が自己や他者へのスキーマに及ぼす影響

自己や他者へのスキーマでは、大きく2つの結果が得られた。第一に、自己へのネガティブ

なスキーマ(NS)の形成に関する結果である。相関分析の結果、NSは褒められ得点と負の相関、叱られ得点と正の相関があった。また、分散分析の結果、NSは褒低・叱高群>褒高・叱低群であった。このことから、曖昧な状況において、褒められることが少なく叱られることが多い者は、自己へのネガティブなスキーマを形成するといえる。

本研究で検討した、褒めるか叱るか曖昧な状況は、子どもの行動にネガティブな側面とポジティブな側面が含まれる状況である。曖昧な状況において、褒めずに叱るという親の対応は、子どもの行動のネガティブな側面のみに注意を向ける対応であると考えられる。曖昧な状況で褒められずに叱られることが多い場合、ネガティブな側面のみが子どもの記憶に蓄積されるのだろう。その結果、自己に関する抽象的・一般的な知識として、「私は価値がない」、「私は愛されていない」などのネガティブなスキーマが作られるのだと考えられる。

このことに関して、褒低・叱低群との比較が有益な示唆をもたらすかもしれない。統計的な有意差はなかったが、NS得点は、褒低・叱高群の方が、褒低・叱低群よりも高かった。つまり、褒められも叱られもしない者よりも、叱られることが多い者の方が、自己へのネガティブなスキーマを形成するといえる。曖昧な状況において、褒めも叱りもしないという親の対応は、子どもの行動のネガティブな側面にも注意を向けない対応であると考えられる。そのため、褒低・叱低群では、自己に関わるネガティブな記憶が蓄積されず、褒低・叱高群よりも自己へのネガティブなスキーマが形成されなかったのであろう。

スキーマに関する第二の結果として、他者へのポジティブなスキーマ(PO)の形成に関する結果が明らかになった。相関分析の結果、POは褒められ得点と有意な正の相関があった。このことから、曖昧な状況において褒められることが多いと、他者へのポジティブなスキーマが形成されるといえる。

本研究で扱った、褒めるか叱るか曖昧な状況は、子どもの意図に反してネガティブな状況が生じた場面である(例えば、物を壊そうと思って壊したわけではない)。そのため、曖昧な状況において褒めるという親の対応は、ネガティブな状況が起こった背景や、子どもの行動の真の意図をふまえた対応であると考えられる。曖昧な状況で褒められることにより、子どもは、親という身近な他者が、自分の思いを理解しようとしてくれる信頼できる存在だと感じるのであろう。その結果、他者に関する抽象的・一般的な知識として、「信用できる」、「心を開いてくれる」などの、ポジティブなスキーマが形成されるのだと考えられる。

養育態度との関連が明らかになったNSやPOとは異なり、自己へのポジティブなスキーマ(PS)や他者へのネガティブなスキーマ(NO)は、曖昧な状況での親の養育態度との関連が示されなかった。興味深い点は、PSと自尊感情には強い正の相関があるのにも関わらず、PSと褒められ得点には相関がなかったという点である。つまり、褒めるか叱るか曖昧な状況においては、褒めるという親の対応が、自己へのポジティブなスキーマの形成にはあまり影響しない可能性が示唆される。

先にも述べたように、本研究で扱った曖昧な状況は、子どもの意図に反してネガティブな状況が生じた場面である。そのため、親から褒められたとしても、子ども自身の認識として、自分の行動のポジティブな側面を十分に認めることが難しいのかもしれない。その結果、親から褒められたとしても、「私は才能がある」、「私はおもしろい」などと感じることができず、自己へのポジティブなスキーマが形成されにくいのだと考えられる。自己へのポジティブなスキーマに対して、自尊感情は、自己に関する肯定的な評価と否定的な評価を含めた包括的な感情である。そのため、曖昧な状況で褒められることにより、自己へのネガティブなスキーマの

形成が抑制され、相対的に自尊感情が高まるのだと考えられる。自己へのポジティブなスキーマは、曖昧な状況よりも、ポジティブな側面をより強く感じられる成功体験などを褒められることにより形成される可能性が示唆される。

(3) 応用的示唆と今後の課題

本研究の結果から、褒めるか叱るか曖昧な状況において、子どもを褒めるという受容的、尊重的な対応をとることで、自尊感情や他者へのポジティブなスキーマが形成されることが明らかになった。また、曖昧な状況において、子どもを褒めずに叱るという対応をとることで、自己へのネガティブなスキーマが形成されることもわかった。先行研究では、自己へのネガティブなスキーマを持つ者ほど、抑うつや不安が高いことが示されている (Fowler et al., 2006; 内田ら, 2012)。精神的健康や適応といった側面から考えるのであれば、褒めるか叱るか曖昧な状況では、ネガティブな側面のみを指摘するだけではなく、ポジティブな側面を見いだして対応していくことが望ましいといえるだろう。

最後に、本研究の限界と今後の課題を述べる。第一に、本研究では褒められた程度、叱られた程度が、自尊感情などに及ぼす影響を検討した。そのため、褒められ方や叱られ方といった、親の関わり方の違いが自尊感情などに及ぼす影響は明らかではない。永田・三崎・森 (2005) は、叱り言葉の種類により子どもが感じる納得度が異なることを明らかにしている。また、納得度の違いが自尊感情に影響することも指摘している。今後の研究では、褒め言葉、叱り言葉の違いをふまえて検討することが求められる。

第二に、本研究では母親と父親の影響を分けて検討していない。また、本研究では、女子のみに調査を行っており、男子への影響は検討していない。先行研究では、母親と父親で、自尊感情に及ぼす影響は異なることが示されている (井上, 2015, 2018)。加えて、男子と女子で親の養育態度に対する認知が異なり、自尊感情に及ぼす影響も異なることが示されている (田ら, 2017)。母親と父親、男子と女子といった性別の違いも考慮して、曖昧な状況での養育態度が子どもの発達にいかに関与するかを、より詳細に検討していく必要があるだろう。

佐々木 (2021) では、褒めるか叱るか曖昧な状況において、子どもを褒めるという受容的な対応が、レジリエンスや保育観の発達を促進することを明らかにした。また、これまでの先行研究においても、親の受容的、尊重的な養育態度が、子どもの発達にポジティブな影響をもたらすことが示されている。本研究の結果も、これらの結果と一致するものである。褒めるか叱るか曖昧な状況においても、子どもの思いを受容し、尊重する対応が重要であることを、改めて確認できたといえよう。

付 記

本研究は、第二著者の卒業論文の研究データを、第二著者の承諾のもと、第一著者が再分析し、執筆したものです。調査にご協力頂きました皆様、どうもありがとうございました。

引用文献

- 児井彰・須崎康臣・横山正幸 (2013). 子どもの自尊感情と生活のあり方との関係についての研究 生活体験学習研究, **13**, 43-50.
- 浅野良輔・吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・玉井颯一・吉田俊和 (2016). 養育者の養育態度が青年の養育認知を介して社会化に与える影響 心理学研究, **87**, 284-293.
- 趙善英・松本芳之・木村裕 (2011). 回想された親の養育行動が大学生の自尊感情に及ぼす影響の日韓比較：行動分析学的な解釈 社会心理学研究, **27**, 1-12.
- Eysenck, M. W., Ellis, A. W., Hunt, E. B., & Johnson-Laird, P. N. (Eds.). (1990). *The Blackwell dictionary of cognitive psychology*. Oxford: Basil Blackwell.
- (アイゼンク, M. W.・エリス, A.・ハント, E.・ジョンソン＝レアード, P. (編)野島久雄・重野純・半田智久 (訳) (1998). 認知心理学事典 新曜社)
- Felson, R., & Zielinski, M. (1989). Children's self-esteem and parental support. *Journal of Marriage and Family*, **51**, 727-735.
- Fowler, D., Freeman, D., Smith, B., Kuipers, E., Bebbington, P., Bashforth, H., Coker, S., Hodgekins, J., Gracie, A., Dunn, G., & Garety, P. (2006). The Brief Core Schema Scales (BCSS) : Psychometric properties and associations with paranoia and grandiosity in non-clinical and psychosis samples. *Psychological Medicine*, **36**, 749-759.
- Galambos, N. L., Barker, E. T., & Almeida, D.M. (2003). Parents do matter: Trajectories of change in externalizing and internalizing problems in early adolescence. *Child Development*, **74**, 578-594.
- 井上清子 (2015). 両親・教師からの褒められ叱られ経験と自尊感情の関連について 生活科学研究, **37**, 97-105.
- 井上清子 (2018). 両親・教師からの褒められ叱られ経験と自尊感情の関連についてⅡ 生活科学研究, **40**, 95-102.
- 伊藤大幸・中島俊思・望月直人・高柳伸哉・田中善大・松本かおり・大嶽さと子・原田新・野田航・辻井正次 (2014). 肯定的・否定的養育行動尺度の開発：因子構造および構成概念妥当性の検証 発達心理学研究, **25**, 221-231.
- Krevans, J., & Gibbs, J. C. (1996). Parents' use of inductive discipline: Relations to children's empathy and prosocial behavior. *Child Development*, **67**, 3263-3277.
- Kawash, G. F., Kerr, E. N., & Clewes, J. L. (1985). Self-esteem in children as a function of perceived parental behavior. *The Journal of Psychology*, **119**, 235-242.
- 永田良太・三崎千尋・森敏昭 (2005). 子どもへの言葉かけに関する研究——「ほめ」と「叱り」に着目して—— 学校教育実践学研究, **11**, 37-44.
- 任玉洁・林雅子 (2020). 親の養育態度が大学生の過剰適応に及ぼす影響——性差の視点から—— パーソナリティ研究 **29**, 23-26.
- Rudy, D., & Grusec, J. E. (2006). Authoritarian parenting in individualist and collectivist groups: Associations with maternal emotion and cognition and children's self-esteem. *Journal of Family Psychology*, **20**, 68-78.
- 佐々木真吾 (2021). 褒めるか叱るか曖昧な状況での親の養育態度がレジリエンスと保育観の発達に及ぼす影響 名古屋女子大学紀要, **67**, 35-43.
- 島義弘 (2014). 親の養育態度の認知は社会適応にどのように反映されるのか：内的作業モデルの媒介効果 発達心理学研究, **25**, 260-267.
- 田玲玲・平石賢二・渡邊賢二 (2017). 中学生の母子関係における親権威の概念の不一致と母子間葛藤、子どもの心理的適応との関連 発達心理学研究, **28**, 24-34.
- 内田知宏・川村知慧子・三船奈緒子・濱家由美子・松本和紀・安保英勇・上埜高志 (2012). 日本版Brief Core Schema Scaleを用いた自己、他者スキーマの検討——クラスターパターンの類型化および抑うつとの関連—— パーソナリティ研究, **20**, 143-154.
- 内田知宏・上埜高志 (2010). Rosenberg自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討——Mimura & Griffiths訳の日本語版を用いて—— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **58**, 257-266.
- 山内貴史・須藤杏寿・丹野義彦 (2009). 日本語版Brief Core Schema Scalesの信頼性・妥当性 心理学研究,

褒めるか叱るか曖昧な状況での親の養育態度が自尊感情と自己・他者スキーマに及ぼす影響

79. 498-505.

吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2017). 養育・しつけが反社会的行動に及ぼす弁別的影响——適応性を考慮した社会的情報処理による媒介過程——教育心理学研究, 65, 281-294.

